

平成 29 年度東京都「児童・生徒の学力向上を図るための調査」（第 5 学年対象） における本校の結果分析と今後の学習指導の取組について

1 東京都「児童・生徒の学力向上を図るための調査」について

東京都の小学 5 年生と中学 2 年生を対象として、「児童・生徒の学力向上を図るための調査」が行われました。本校児童の結果のまとめと、今後の取組をお知らせします。

3 結果の分析と今後の取組（○現状、△課題、→改善のための本校の取組）

実施 教科	A 問題 (主として知識に関する問題)	B 問題 (主として活用に関する問題)
国語	○「関心・意欲・態度」について 100%の児童が肯定的な回答をしていた。 →児童の実態や関心に沿った学習が進められている。 △「知識・理解」の言語に関しては、正答率が、東京都の正答率より 10%以上低い。 →漢字の反復練習や、日常の学習で積極的に漢字を使用する習慣をつける。	△「取り出す力」「読み取る力」「解決する力」の総合の正答率は、ほぼ東京都の正答率に並ぶ。「読み取る力」は、正答率が東京都の正答率と同程度とはいえ、向上を目指したい。 →読解の際に、意見交換の時間を取り入れたり、感想を伝え合ったりなど、一つの課題に対して深く考える機会を増やしていく。
社会	○「関心・意欲・態度」についての問題では 90%近い正答率である。 →児童の生活と関連させながら学習を進めていくことで関心を高めることができる。 △「思考・判断・表現」についての問題では都の平均正答率を 7%下回った。 →授業の中に自分の考えを書いたり、友達と意見を交流したりする時間を意図的に取り入れる。	△読み取る力をみる問題では、正答率が 50%を下回っている。 →グラフや資料を読み取る時間を授業に取り入れる。また、数値や結果だけを読み取るのではなく、そこから何が分かるのかということまで掘り下げるようにする。
算数	○「技能」についての問題では、東京都の結果と比較してもよくできている。 →技能を定着させるには、反復練習が必要であるため、引き続き習熟度別指導を通してきめ細やかな指導を行う。	△読み取る力をみる問題では、東京都の平均正答率を約 5%下回った。 →自分の考えを表現することだけでなく、書かれた又は話された友達の考えを理解する力を高める。考えを共有するツールとしての ICT 機器の活用を、より一層図っていく。

理科	△読み解く力に関する内容の正答率が 80%を超えているのに対し、教科の内容の正答率はやや低い。 →特に正答率の低い「技能」の観点伸ばすため、見通しや目的意識をはっきりとさせてから実験を行ったり器具を操作したりすることを定着させる。	○「取り出す力」「読み取る力」「解決する力」の全ての観点において、学年の正答率も学級毎の正答率も、都の平均を上回っている。 →理科を担当する講師が両学級で指導している。指導上のポイントを共通して指導することができている成果と捉えられる。
質問紙調査 児童・生徒	○話し合い活動に対して肯定的な回答をした児童は、教科の正答率も高い傾向がみられる。 →話し合い活動そのものが教科の理解につながったというよりも、話し合いにより学習への意欲を高めたり、知識を得るきっかけになったりという、学習の取組の質が高まったと理解できる。意欲を維持しつつ、深い学びにつながるような話し合い活動となるよう授業改善に取り組む。 ○コース別授業（本校においては3～6年生の算数科において実施している習熟度別指導）に対して全ての児童が肯定的な回答をしていた。また、習熟度別指導を実施している算数科においては、7割の児童が正答率の上位グループに属している。 →習熟度別授業については、年度当初の保護者全体会で概要を説明し、子ども達に対してもその意義を伝え続けてきた。進め方指導方法への理解が学習効果を高めたと考えられる。学習の導入において、めあて等と併せて学習の進め方を提示することで、見通しをもって学習に臨めるようにしていく。	

3 結果のご家庭での活用について

教科数の多い調査であり、実施にあたっては午前中いっぱいの時間を要しました。そのような中で、子ども達はよく集中力を持続し頑張ったと感じています。ご家庭においても、引き続き学習の時間は集中して取り組むことができるよう励ましの言葉をかけていただけますと幸いです。

また、家庭学習は、発展的な学習に取り組むよい機会でもあります。同時に、基礎を見直す機会としたいものです。学校での学習指導においても、子ども達の意欲の高さや発想のよさを活かしつつ、折にふれて振り返りを含めながら基礎・基本の定着を確認して学習を進めていけるように努めていきます。